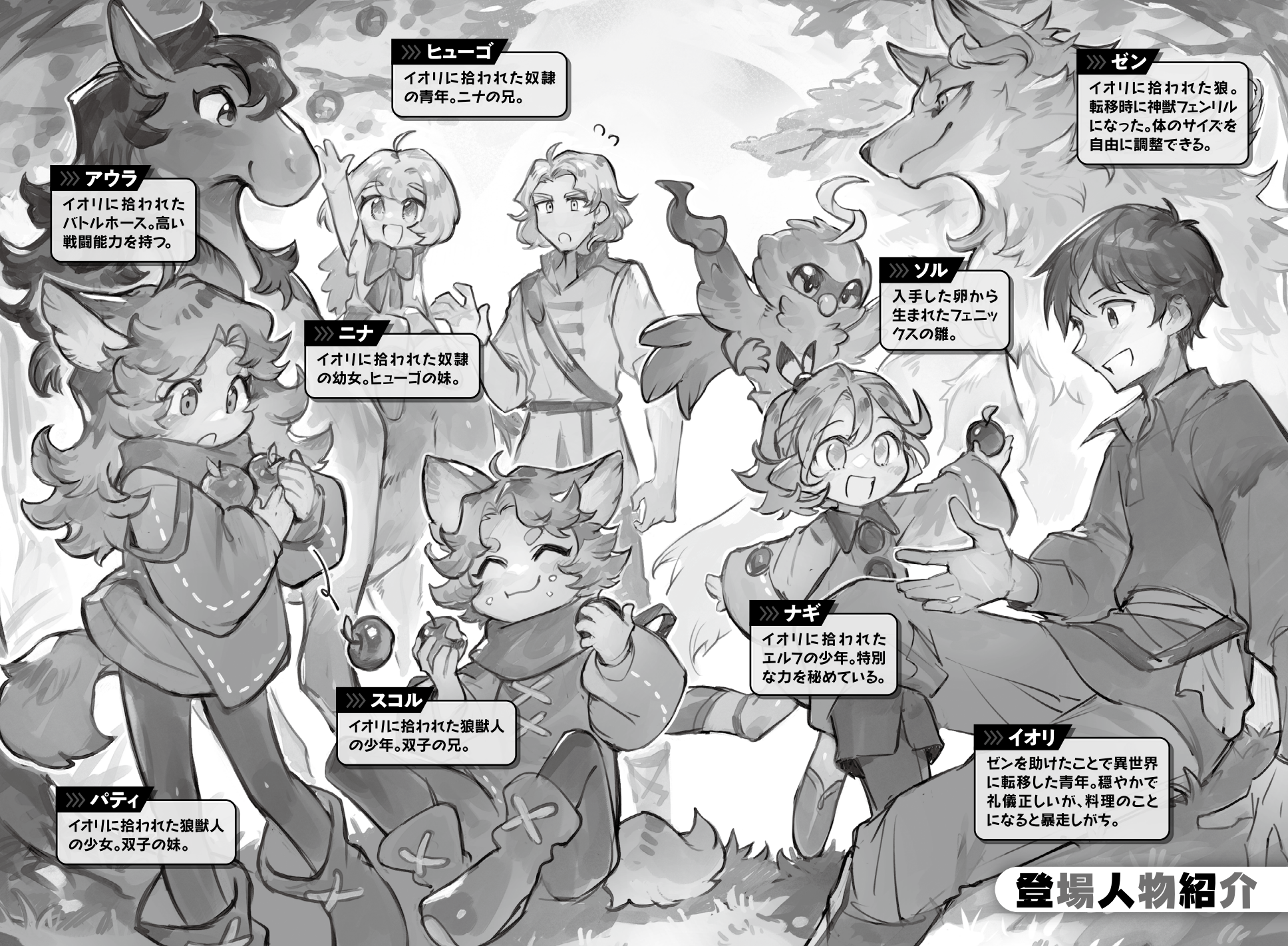
拾ったものは大切にしましょう

～子狼に気に入られた男の転移物語～

5

著 ぽん　ill. TAPI岡


ヒューゴ
イオリに拾われた奴隷の青年。ニナの兄。
ゼン
イオリに拾われた狼。転移時に神獣フェンリルになった。体のサイズを自由に調整できる。
アウラ
イオリに拾われたバトルホース。高い戦闘能力を持つ。
ソル
入手した卵から生まれたフェニックスの雛。
ニナ
イオリに拾われた奴隷の幼女。ヒューゴの妹。
ナギ
イオリに拾われたエルフの少年。特別な力を秘めている。
スコル
イオリに拾われた狼獣人の少年。双子の兄。
イオリ
ゼンを助けたことで異世界に転移した青年。穏やかで礼儀正しいが、料理のことになると暴走しがち。
パティ
イオリに拾われた狼獣人の少女。双子の妹。

登場人物紹介

慣れ親しんだ〝ポーレット〟の街を離れ旅を続ける相沢庵（あいざわいおり）――イオリは、相棒の神獣フェンリル――ゼン、心優しいバトルホースのアウラ、双子の狼獣人スコルとパティ、エルフのナギ、そして新たに家族となった真紅の小鳥、フェニックスのソルと共に、山を掘って築かれた地下都市〝アンティティラ〟を訪れていた。

魔道具の職人達が集まる不思議な街に心躍らせるイオリ達は、冒険者ギルドのマスターのヨルマ、サブマスターのデューク、少し荒っぽい神父のダーグル、グラトニー商会支部長のアンナとの出会いを経て、アンティティラの街を堪能する。

この街で、求めて止まなかった冷蔵庫や、ダンジョンで獲得した魔石で作るアクセサリーを注文したイオリは、続いて理不尽な運命の末にアンティティラで奴隷に身を落としていたヒューゴとニナの兄妹と面会した。

当初、イオリを警戒していた兄ヒューゴであったが……声を失い感情さえも表さない妹ニナが初対面のイオリに対し笑顔を見せた事に驚き、加えて、かつての雇い主であったアーベル・グラトニーの推薦を得ていたことを知ると、妹ニナと共にイオリについていくことを決心するのだった。

そんな兄妹との出会いの裏で、イオリはアンティティラを狙う事件にも巻き込まれていく。

何とか街に被害を出さずに事態を収束させたイオリ達は、流れで激レア魔獣グリフォンを討伐する依頼を受けることに。
こちらも難なく解決したイオリ達であったが、一連の騒動の裏にいる貴族の存在を感じ取り……
イオリはギルドの依頼を受けて真犯人を追うこととなった。
向かう先は、奇しくもイオリが次に目指していた港街〝ダグスク〟だった。
ダグスクへ向かったイオリ達は、到着早々に若き領主オーウェン・ダグスクと出会い、ダグスクの街で起こっている問題にも巻き込まれていく。
ただ、このダグスクという街が、自身にとってかけがえのない特別な街になるとは、この時のイオリは知るよしもなかった……。

第1章　ダグスク散策

1

朝ごはんも食べ、片付けを終えるとイオリ達はいよいよダグスクの街へ繰り出した。
別邸を出て道沿いに進めば海まで着くとのことだったので、軽い散歩だと徒歩で行くことにする。
快晴の空はなぜか山で見た色とは違う気がした。
ささやかな違いを楽しみつつ、イオリ達は道を歩く。
大通りに出ると朝市が終わったばかりの時間だからか、人の出入りもあり賑(にぎ)わっていた。
荷車や人の行き来の邪魔にならないようにイオリ達は進む。
「朝の時間はポーレットより人が多いな……。みんな逸(はぐ)れないようにね」
イオリはゼンの背に双子を乗せ、ナギとニナをアウラに乗せた。
そして、イオリとヒューゴで挟むように歩いた。
ソルはイオリの肩にとまり、首を動かし色んなものを見ていた。
「イオリ。あれだ」
ヒューゴが指さす建物には、冒険者ギルドのマークが掲げられた看板があった。

木の扉を開くと、中は冒険者達で賑わっていた。
ダグスクの冒険者ギルドは扉を開けてすぐ、1階の正面に受付があり、左手に依頼ボードがある。
右手は酒場になっていた。
今までのギルドと違うのは、反対側にも出入り口があることだ。
そこから冒険者が出入りしている。
イオリ達が受付に並ぶと、新顔に興味津々の冒険者達が視線を向けてきた。
順番になると受付の男性が笑顔でイオリ達を迎える。
「おはようございます。ダグスクへは初めてですか？　ギルドカードはお持ちですか？」
「はい。みんな出してー」
イオリ達がカードを出すと、男性はそれぞれを確認していく。
イオリのプラチナカードを手にするとビクッ！　と動きが止まったが、笑顔を崩すことなくカードを返却した。
「確認しました。次回は2階の受付をお使いください。上位ランクの方の受付は2階にございます。パーティーランクもAランクですので、皆さん一緒で問題ないです。こちらで、何かご用はありますか？」
イオリはギルドマスターへの取り継ぎを頼む。

「昨日、訪問すると約束したんです。イオリが来たと言えば分かると思います」
「承りました。少々お待ちください」
男性はそう言うと足早に席を離れる。
そして、戻ってくると受付を別の人に任せイオリ達を案内した。
「お待たせしました。ギルマスのお部屋へ案内します」
イオリ達は男性について3階まで階段で上った。
3階にいくつかある部屋のうち、男性は赤い扉の部屋をノックした。
「お連れしました！」
扉が開くと、中でギルドマスター、ソフィアンヌと男性が待っていた。
「おはよう。早速、来てくれて良かったわ。この人はサブマスのブルック。私がいない時は頼りにすると良いわ。さぁ、入ってお座りなさい」
受付の男性に礼を言い、ブルックに会釈をした。
「イオリです。よろしくお願いします」
いつもの通り家族を紹介すると、ブルックは豪快に笑った。
「ワハハ！　本当に新しいSランクがこんな若造とはな⁉　時々いるんだ。桁違いの奴が」
ハァーとソフィアンヌはため息をつくとブルックの頭を殴り、ソファーに座った。
「ごめんなさい。行儀がなってないの。強い者を見れば今でもうずくって。何歳になっても、子ど

もでしょう？」
「うるせー!!　ババアの説教は面倒なんだよ」
「あぁん!?」
怖い顔で睨(にら)み合う2人を放ってイオリはソファーに座り、子ども達も座らせる。
ヒューゴはイオリの背後に立つと、耳打ちした。
「本当にお前はこういう時、全く気にしないな……。普通だったらビビってるぞ？」
「そうですか？　仲良さそうで良いじゃないですか？」
イオリの言葉が耳に入ったのかダグスクのギルマス、サブマスコンビは目くじらを立てて叫んだ。
「仲良くないわよ!!」
「仲良くねーよ!!」
「ほらー！」
ゲラゲラとイオリが笑うと、子ども達もキャッキャと笑った。
「本当に馬鹿らしくなるわ……。イオリ、エルネの捕獲依頼は私の権限で完了と見なすわ。あとで、受付に行きなさいな。2階の受付よ。Aランク以上はそっちを使うようになってるの」
「ランクによって、階が分かれてるのは初めてです。何か意味があるんですか？」
「あぁ、ここは港街でしょう？　他国へ向かう拠点でもあるから、上位ランクの冒険者が集まりやすいのよ」

「なるほど……。じゃあ、高ランクが集まる凄い街ですね」
「でも、良いことばかりじゃないの。高ランク冒険者ってのはプライドの塊が服を着てるような連中ですからね。揉めごともしょっちゅう。アンタのように穏やかな冒険者は珍しいのよ」
ソフィアンヌは苦笑すると話を続けた。
「アンタの依頼は完了だけどね。エルネが変なことを言ってたから一応伝えとくわね。イオリって名前を使ったのは、フードをかぶった奴に指示されたからだって。ミケルセン伯爵のコインもその人物からもらっているし、アンティティラでの件もその人物から依頼されたものらしいわ。もっとも、その人物の裏に別の誰かがいるみたいだけどね。イオリがSランク冒険者だったのは知らなかったらしいわね」
「……ふーん。その人が誰だかは分からないけど、裏にいるのはミズガルドのメンドー侯爵(こうしゃく)ですかね？」
「イオリ……メンドーじゃない。メドゥイ侯爵だ」
ヒューゴが言い直すと、イオリはニコニコしながら、「それそれ」と言う。
それを見て、ソフィアンヌは呆(あき)れたように笑った。
「アナタは……。メドゥイ侯爵……そうだろうと私達も睨んでるの。でも、大きな証拠があるわけではないわ。何にしても、イオリの名前を使いイオリの存在を利用しようとした人間がいることは間違いない。注意しなさいな」

「ありがとうございます。そうしましょう。俺はまだしも、子ども達に危害を加えられるのは本望じゃありませんから……」
ニコニコしていたイオリの目つきが変わったことで、ソフィアンヌは何者かが眠れる狼を刺激していることに気づいた。
「なー。お前さんは当分ダグスクにいるのか？」
静かに話を聞いていたブルックが会話に入ってきた。
「はい。そうする予定です」
「そうか！　それなら、〝珊瑚の小箱〟っていう飯屋があるから行ってみてくれ。俺の嫁さんの店なんだ。ビルデの飯は美味いぞー!!」
そう話すブルックの頭をソフィアンヌが殴った。
「大事な話をしてる最中でしょうが!!　自分の店の宣伝してんじゃないわよ!!」
「いってーなー!!　ババアがでけー声出してんじゃねーよ！」
再び始まった喧嘩の間に、イオリはヒューゴと子ども達に「お昼は珊瑚の小箱に行こう」と伝えた。
呆れたようにヒューゴが突っ込む。
「……お前止めろよ」
「どうせいつかやめますって」

言い合いに疲れたのかハァハァと息を切らす2人に、イオリはニッコリ笑って言った。
「昔からのお知り合いなんですか？」
「え？　このオッサンと？　腐れ縁って奴なのよ。若い頃パーティー組んでたの」
「そうそう。俺とこのオバさんと、侯爵の坊ちゃんのとこにいるレイナードで旅してたんだ」
「へー！　レイナードさんも？　ずっと、騎士団所属なのかと思ってました」
ブルックはニヤつきながら頷いた。
「アイツは元々騎士だ。ずっとダグスク侯爵に仕える家系だった。だが、何がどうしてかアイツはこのソフィアンヌに惚れちまった。だから、暇状を出してコイツの旅にくっついて行っちまったんだ。俺とソフィアンヌは元々この街所属の冒険者で、時々仕事も一緒にやった仲だったんだ。俺とレイナードの気が合ったことで、3人でパーティーを組むことになった。やがてレイナードが騎士団に戻るっていうからソフィアンヌも引退して、結婚後ギルドで働くようになって……ギルマスにまで上り詰めたんだ。俺は2人が引退したあとも冒険者を続けたんだが、つまんなくなって引退した。同時期に妻のビルデと出会ったからちょうど良かったんだ。今でも、仕事で魔獣の討伐にも出たりするし、満足してる」
ブルックがニコニコと話す横でソフィアンヌは顔を赤らめていた。
「ペラペラと恥ずかしい昔話を……」
そんなソフィアンヌにイオリはニッコリとして言う。

「良いじゃないですか。昔があっての今です」
ソフィアンヌは苦笑すると紙をイオリに渡した。
「これを換金して報酬にしてちょうだい。ここでは受付で換金までしてくれるわ。他に聞いておくことない？」
「んー。それじゃ、魔獣の買取をお願いしたいです。アンティティラからダグスクまでに俺以外のメンバーが討伐してきたんです」
「へー。それじゃ、解体場に案内しましょう。それにしてもイオリ以外が討伐って……あぁ、ランク上げが目的ね。だったら、私達が行った方が話は早いわね」
ソフィアンヌはこの時知らなかった。
解体場が戦場のようになることを……。
それほどの魔獣を子ども達が討伐したとは……。
イオリの腰バッグで魔獣達の素材が出番を待っていた。
「食べられる肉はダメですよ？　食べるんで」
呑気（のんき）なイオリはソフィアンヌとブルックのあとを追った。

「さぁ、ここよ。リンファ！　いる？」
「はぁーい！」

奥から、頭をお団子に結い上げた眼鏡の少女が走ってきた。
「ギルマス！　なんですか？」
「こちら、Sランク冒険者のイオリよ。彼の仲間が旅の道中、魔獣を狩ってきたらしいの。見てくれる？」
「承知しました。初めまして。解体場で働いているリンファと言います。解体自体は父と兄が担当します。まずは、私が見せてもらっていいですか？」
「イオリです。どうぞよろしく。ここでいいですか？　ちょっと大きいのがあるんですけど？」
リンファは少し考えると近くのスペースを指差した。
「じゃあ、あちらにお願いします。そのまま置いていただいて良いですよ」
「了解です。食べられる肉は持ち帰るんで、よろしくお願いします」
「承知しました。お肉は持ち帰りですね。塊で良いです？」
「はい。あっ、1体のギガバイソンは俺が狩りました。途中で解体してきたんで素材だけ売ります」
明快なリンファは、イオリにとって好印象だった。
イオリがギガバイソンの素材を出すと、リンファは手慣れた手つきで大きさを測っていった。
「なるほど……。良い状態ですね。解体も見事です。ご自分達だけで？　良い腕です」
大きさや買取査定額を記入しながらリンファは作業を続ける。

「途中で、ゴブリンの集落がありましてヒューゴさんと双子が殲滅しました。ゴブリンは売り物にはならないので、証明のために耳だけを切り取ってきました」
「はい。確認します……結構大きな集落だったんですね。被害が報告されてないとはいえ、いつ人が襲われても不思議じゃない数です」
眼鏡をずらしながら耳を数えるリンファ。
「じゃあ、これがメインのヒュドラです」
ヨイショッとイオリが腰バッグから引き上げたのは、床を埋め尽くすほど大きなヒュドラだ。
「!!　これは……。ちょっと失礼します。父達を呼んできます」
足早に奥へ行くリンファを見送っているとソフィアンヌが驚いたように言った。
「何なのこれは……。これがアンティティラからダグスクの間にいたってこと？」
「はい。流石に俺達も驚いたんですけど、ヒューゴさんと双子が手を出すなっていうから、その間に料理して待ってました。疲れていたけど、危なげなく終わらせていたんで安心しました」
イオリがそう説明すると、ソフィアンヌは茫然とし、ブルックは爆笑する。
「ちょっと、あとで話を聞かせてもらうわよ！　どんなふうに現れて、どう倒したのか？　全く、なぜ先に言ってくれなかったの!?」
「うるせーよ。ソフィ！　こいつらには当たり前の処理だったんだろうよ。こりゃ、ランクの上昇は確実だな」

「分かってるわよ！　それにしても、リーダーの貴方は料理してたって……。はぁー。分かったわ。ヨルマさんの言う通り、規格外ってことね」
ソフィアンヌのため息のあとに、奥から男性2人が急いでやってきた。
「ギルマス！　ヒュドラだって？　おぉぉ！　本物だ！」
「イオリさん。父のハンランと兄のコージュンです」
やってきた2人はイオリ達に目をやると驚いたように会釈した。
「他に変わった魔獣がいませんでした？　ギルマス、この前報告しましたけど最近、ここいらじゃ見ない魔獣を持ち込む冒険者が増えてきたんです。それで今回はヒュドラだ。何かおかしいよ」
コージュンが心配そうにソフィアンヌに言った。
「ええ、そうね。調査隊を向かわせるわ。王都にある本部にも報告しておきましょうね」
気が張った雰囲気の中、ブルックがハンランに声をかけた。
「どうだい？　ハンラン。良いものかい？」
「当たり前だろ！　このヒュドラで、どれくらいの防具や武器が出来ると思っている。イオリさんだったか、すぐに解体するよ。でも、金額は査定に時間がかかりそうだ」
「大丈夫ですよ。少しの間ダグスクでお世話になるので、査定が終わり次第ご連絡ください」
イオリの笑顔にホッとするハンランは、コージュンとリンファに指示を出しヒュドラを運ばせた。
「私達は一度部屋に戻りましょう」

ソフィアンヌはイオリ達の背中を押し解体場から部屋に移動させた。
「で？　ヒュドラの出現はどの辺だったのかしら？」
質問には全てヒューゴが答える。
なんせ、イオリはナギとニナと共にプリンを作っていたのだ。
ヒューゴの報告は完璧だった。
いつどこで現れ、どのように攻撃し、ヒュドラを倒したか……。
ソフィアンヌだけでなくブルックも真剣に話を聞く。
「驚いた。子ども達はお飾りじゃなくて立派に戦闘をこなしているってことなのね……。うん。これはランクを上げなければいけないわね。どう思う？」
ソフィアンヌはブルックに顔を向けた。
ブルックは顔をしかめて考えると唸るように言った。
「1つのパーティーが単独でヒュドラを討伐したんだ。しかもリーダーなしで……。普通に考えたらAランクだろ……」
「そうよね……。よしっ！　決めた！　どちらにせよ、アナタ達はAランクまで行くでしょうから、ダグスクで昇格しても変わりはないわね。全員Aランクにランクアップよ！　それと……」
少し寂しそうにしているナギの顔を見て、ソフィアンヌは顔を近づけた。

「アナタは何をしたの？」
ビクッとしたナギはイオリの懐に隠れると小さい声で呟いた。
「……。ゴブリンが荒らした野原を元に戻した……」
「そんなことが出来るの⁉　凄いわね！　ナギだったかしら？　今はDランク？　Cランクにレベル上げね。Cランク以上は、直接魔獣討伐に参加する必要があるわ。でも忘れないで、アナタみたいな後方支援のメンバーも重要なのよ。ここには高ランクの冒険者が集まりやすいけど、多くの人間がそれを忘れてしまっているの。戦いで荒らした場を誰が片付けるの？　自然の力で補えない時、アナタの力が必要になるのよ」
ナギは、嬉しそうに目をキラキラさせてソフィアンヌを見た。
「良いパーティーをお持ちね」
ソフィアンヌは顎を上げイオリに笑いかけた。
見事にランク上げの目標を達成したヒューゴと双子は大いに喜ぶ。
良い評価を受けたナギも誇らしげにイオリにギルドカードを見せた。
「おめでとう。いつもありがとう」
イオリに抱きしめられてナギは嬉しそうに頷いた。
「ナギとニナがいるから、みんな戦闘後に穏やかに過ごせるんだ」
イオリは腰バッグからボーロを出すと、まだ冒険者ではないニナの口に1つ入れてやった。

「みんなはご褒美をもらえたからね。ニナにもご褒美だ。いつも、ありがとう」
ニッコリとしたニナはイオリに抱きつき嬉しそうに揺れていた。
「「いつも、ありがとう!!」」
双子もイオリに倣ってかナギとニナを抱きしめ、ゼンとアウラもペロペロと2人を舐めていた。
子ども達の笑い声に包まれた部屋の中で、ソフィアンヌ、ブルック、ヒューゴは一連の光景を見て微笑んだ。
「これが、ポーレット公爵家が愛する青年ね……」
「小僧の人徳だろうな。良い奴だとしても、最上級貴族から愛されるなんて、誰にでも真似出来ることではないぞ」
「イオリは……。人の心を救うんです。本人は意識してないけど、ドロドロした不安や怒りの霧を晴らすように支えてくれる。ただ助けるのではなくて、一緒に進もうと言ってくれる。イオリ達といると、不思議と前より笑っていられるんです、俺……。表情がなかった妹が、口を開けて笑っている。でも……心配です」
ヒューゴの不安が手に取るように分かるソフィアンヌとブルックは、ヒューゴの肩を叩いた。
「誰かがイオリを狙っている。そして利用しているからでしょう？　少なくとも、この街ではそうはさせないわ。すでに、ミケルセン伯爵がSランク冒険者の名を利用しようとしたと噂になっているわ。冒険者達はカンカンよ」

「冒険者は自由の象徴。専属になるのは名誉だが、利用されるのはプライドを踏みにじる行為だ。しかもSランクにそれをしたとなれば、どの冒険者もミケルセン伯爵からの依頼を受けることはないだろう。どんなに気にいらない相手だろうがSランクには敬意を……。俺らはそれを譲ることが出来ない」
ソフィアンヌとブルックの言葉にヒューゴは深く頷いた。
大人達の会話が聞こえたのだろう。
心配そうに目尻を下げるゼンの頭をヒューゴは撫でてやった。
「大丈夫。家族は俺が守るよ。イオリは簡単にやられはしないし、ゼンもいるだろ？」
ゼンは頷くと子ども達と戯れるイオリを見つめた。
「じゃあ、お世話になりました。レベル上げも出来たし、報酬も頂きました。解体はご連絡待ってます。今日は、他にも行くところがあるので失礼しますね」
ソフィアンヌ達に礼を言ってギルマスの部屋を出ようとしたイオリに声がかかった。
「この街でも、依頼の1つくらいやってくれると嬉しいわ。それに、旅に出ていた息子達が近々帰ってくるの。紹介させてね」
「ソフィアンヌさんとレイナードさんの息子さんなら喜んで」
「俺の息子も一緒だ。お前！　ビルデの店に行けよ！」
ブルックのゴリ押しに笑うイオリは手を振ってギルドから出ていった。

△　△　△

イオリが出ていった冒険者ギルドではある噂が流れた。

外から来たSランクは、若い男だという。

「黒狼」。

黒髪で、片眼はサファイヤのように綺麗な青色。

そんなSランクを利用した貴族がいた。

名を騙った冒険者がいた。

青色の瞳に睨まれたら散るのは早い……。

悪事がバレて今はどこにいるのやら。

Sランクはただの強者ではない。

認められた唯一の者だ。

冒険者をバカにしたものの末路は誰にも分からない。

2

「さぁ、次はグラトニー商会に行こう！」

冒険者ギルドを出たイオリ達は港を歩きながらダグスクにあるグラトニー商会を目指した。

やはり、朝市の影響だったのか先ほどよりは人の流れも落ち着いている。

お馴染みのグラトニー商会の看板を見つけるとイオリは扉を開いた。

「いらっしゃいませ……。おや？　ヒューゴじゃないか!!」

商会に入ってすぐに現れた男性がヒューゴに驚いて声を出した。

「フリオさん？　フリオさん!!　どうしてここに？　王都にいるのではないんですか？」

２人はガッチリと握手をして再会を喜んだ。

「お前……聞いたぞ！　自分の身を……。全く！　大旦那と旦那がどれだけ心配なさってたことか！　馬鹿野郎!!」

泣くのか怒るのか忙しいフリオと呼ばれた男は、ヒューゴの胸をドンドン！　と叩いた。

「すみません。俺はするべきことをしていると思い込んでいたんです。皆さんに心配をかけてる……そんなことを考える余裕がなかった。申し訳ないです。でも、アーベルの大旦那さんが最高

の主人に出会わせてくれました。主人のイオリです。支部長にお目通りしたいんですけど……」
フリオはイオリに頭を下げると、涙を拭いてから顔を上げた。
「ありがとうございます、イオリ様。私はフリオ。今はカイ様の元におりますが、元々は王都の本店に所属していた旅団の一員でした。大旦那様のお仕事で遠出する時にヒューゴとよく一緒に旅をした仲なのです。ヒューゴのその後を大変心配しておりました。やっと買い取られたと聞いていましたが、会えると思っていませんでした。初めてのご挨拶で失礼を……」
イオリは首を横に振るとフリオに頭を上げるように言った。
「ヒューゴさんは、どれだけ人に心配をかけていたか知るべきなんです。フリオさん、初めまして。イオリです。アーベルさんにはポーレットでお世話になっていました。カイさんにお会いしたいんですが、お取り次ぎ願えますか？」
「そうでございました！　失礼いたしました。ただいま、確認してまいります!!」
走って階段を上がっていくフリオを見送るとヒューゴは恥ずかしそうに頬を掻いた。
「フリオさんは年も近くて気が合うから、旅の時によく話してんだ。兄のようだった。あんなに心配してくれていたなんて……。俺は幸せ者だな」
そんなヒューゴを諌めるように、子ども達がすり寄った。

「お待たせいたしました。お部屋へ案内します」

フリオは慌てた様子で階段を下りてきた。
「フリオさん。妹のニナです」
ヒューゴがニナを抱き上げてフリオに見せると、フリオは満面の笑みを浮かべた。
「そうか……君が……。初めまして」
ニナはフリオをしばらく観察すると、抱っこしろとせがむように両手を広げた。
「えっ……。良いのかい？」
恐る恐るニナを抱いたフリオは、目を赤くしてニナを軽く揺すった。
ニッコリ笑うニナに心を撃ち抜かれたフリオは抱き上げたまま階段を上っていく。
イオリ達はあとを追うように階段を上る。
ポーレットともアンティティラとも違う、ダグスクのグラトニー商会の、港街ならではの派手な建物を楽しんだ。
「支部長。お連れしました」
「ありがとう……何ですかフリオ？」
ニコニコとニナを抱き上げているフリオを見て、カイは困った顔をした。
「ヒューゴの妹は俺の妹みたいなものですから！」
「馬鹿なことを言ってないで、お返ししなさい。そして、お茶を淹れてきなさい」

名残惜しそうにニナを下ろすとフリオは部屋から出ていった。
「大変失礼しました。仕事は出来るんですが、変わった子なんです。どうぞ、座ってください」
カイはイオリ達に座るように勧めた。
「フリオさんはヒューゴさんを心配されてたそうなので、仕方ないと思いますよ？」
イオリは笑いながらソファーに座った。
「そうですね。フリオとヒューゴさんは王都の本店の仕事で出会ったのです。王都に行かれた際は、どうぞ本店の兄にも会いに行ってください。ヒューゴさんの顔を見られて喜ぶでしょう」
ヒューゴは恐縮するように頭を下げた。
カイが言葉を継ぐ。
「昨日の塩の製造販売の話は大変驚きました。仕組みや製造は侯爵様のお考えを今一度聞く必要がありますが、我々は販路の確保を模索しています。そのためには、ホワイトキャビンと同じ方法を取ろうと考えています」
ホワイトキャビンとは、グラトニー商会のポーレット支部にある、イオリの考えを商品化する部署のことである。
「はい。良いと思いますよ。塩も砂糖も変わりませんしね。まぁ、資源の枯渇の心配のない塩の方が安定供給出来ますし、金額の変動がない方が広がりやすいでしょうね」
カイはイオリの意見に賛成するように頷いた。

「それでは、砂糖と同じようにレシピを売るというのはどうですか？　油で揚げるなどの調理法は知りませんでしたし」
「本当ですか？　それなら、昨日のフライドポテトはどうですか？　大きさや形によって食感も食べ方も変わるんで応用が利くと思いますよ。基本的に塩味は知られているんで、形の変化で比べましょう」
イオリが自分の考えを理解し答えを出してくれるため、カイは満足げに笑った。
「ホワイトキャビンのバートに伝えましょう。イオリさんがポーレットを出発してから、バートは目まぐるしい日々を送っているようですよ。ずっと、生き方を決めかねていた子なので、夢中になるものを見つけてくれて喜ばしく思っています」
「そうですか……。まぁ、それが嫌で俺は逃げちゃったんですけどね。ハハハハ！」
２人で笑い合っていると、フリオがカイの息子のアクセルと共に現れた。
「こんにちは。イオリさん。皆さん」
手際良く紅茶を差し出すアクセルに挨拶をすると、子ども達がそれぞれのバッグからお菓子を取り出した。
「王都に行くまで、こちらで見習いをさせているんです。皆さんが出したのがお菓子ですか？　興味深い……」
眼鏡に手をやり身を乗り出すカイにスコルがクッキーを差し出した。

「これは木の実が入ったクッキーだよ。どうぞ」
「では1つ……。甘くて良い匂いです」
クッキーを食べるとカイは微笑んで紅茶に手を伸ばした。
「まさに、嗜好品ですね。紅茶ともよく合う。貴族の茶会に必要という意味が分かります」
子ども達は喜ぶとアクセルやフリオにも食べさせた。
「まぁ、甘いものが好きではない人もいるでしょう。そのためにフライドポテトのようなものが流行るかもしれませんね」
「それなら、ダグスクが広めましょう。イオリさんの嗜好品を……」
カイはやる気に満ちた顔をした。
イオリが気になっていたことをカイに尋ねる。
「ところで、カイさん。ダグスクに朝市があるとか？　執事のカールさんに聞いたんです」
「えぇ。毎日、港で行われます。取れたての魚や肉、野菜が売られますよ。イオリさんにも楽しんでいただけると思います」
嬉しそうにイオリは頷くと、もう1つこの街に来た目的について尋ねる。
「海藻なども置いてますか？　あと……。魚を干したものなどは？」
「海藻ですか？　海藻は食べませんよね？　……食べるんですか？　それと魚を干すとは？　普通、魚は新鮮なものを焼いたり煮たりします。使い切れない分はオイルにまぶして保存しますが……」

イオリは話を聞いて、ヨーロッパと同じかな？　などと考えていた。
ここで鰹節を見つけるのは難しいかもしれない。
難しい顔をするイオリの耳にアクセルの声が入ってくる。
「父さん。エナばあちゃんを紹介したらどう？　何か知ってるかもしれないよ？」
カイは手をパンっ！　と叩きイオリに笑顔を向けた。
「お探しの物があるか分かりませんが、港の外れにエナというご婦人がおりましてね。我々が知らない食材を集める偏食家なんです。何かお役に立つかもしれませんよ？」
面白そうだとイオリは頷くと、家族の許可を得てから向かうことにした。
案内はアクセルが請け負ってくれることになる。
「イオリさんとは年も近いですし、街のことは知り尽くしているのでお役に立つかと。どうぞ、使ってやってください」
微笑むカイにお礼を言い、イオリはアクセルに頭を下げた。
「よろしくお願いします」
「こちらこそ。お爺さまを助けてくれた冒険者だと聞いた時からお話がしたかったんです。ありがとうございます。同じ年くらいなのに、旅をして僕より知らない物を沢山見てきている……。短い間ですが勉強させてください」
爽やかに笑うアクセルに子ども達も好意的だ。

「早速、エナばあちゃんの元へ向かいましょう。今の時間ならいますから」
カイとフリオに別れを告げ、イオリ達はグラトニー商会をあとにした。

エナばあちゃんの元へ行くまでに、子ども達がアクセルを質問攻めにする。
「王都へは行ったことある？」
「あるよ。この街とは全く違う街並みで驚いたよ」
「この街に本屋さんはある？」
「あるよ。外国の商船も来るから変わった本があるんだ。今度案内するよ」
「アクセルの兄弟はどうしてるの？」
「今日は家にいるね。上の妹は刺繍やちょっとした髪飾りを作るのが好きでね。下の妹は体を動かすのが好きなんだ。将来、冒険者になるって両親を心配させてる。一番下の弟は出てくる時、犬と靴下の取り合いをしていたよ」
「アクセルの家は何色？」
「僕の家は黄色。家の中は白いけどね」
なんだかんだ、話しているうちに港の外れまで歩いてきていた。
そこは大通りよりも少し寂しい様相だが、おそらく周辺の住人があえてそうしているのだとイオリは思った。

「ここです。エナばあちゃーん！　グラトニーのアクセルです。いますかー？」
しばらくすると、扉が開き背の小さな老女が出てきた。
「なんだい。今日は坊だけかい？　大将は??」
「父は店にいます。今日は客人が探し物があって、エナばあちゃんなら知ってるんじゃないかと思ってお連れしたんです」
「そうかい。そっちの人達だね。グラトニーが言うんじゃ、変な輩じゃないんだろう。入っといで」
そうして、イオリ達は摩訶不思議なエナという老女に迎え入れられたのであった。

エナばあちゃんの家はなんとも懐かしい匂いがした。
イオリ達がキョロキョロとしていると、エナばあちゃんはケラケラ笑いながら手招きをした。
「取って食いはしないよ。遠慮せずに入っておいで」
イオリは部屋に入ると会釈をした。
「初めまして。冒険者をしていますイオリと言います。突然の訪問、失礼します。海産物の乾物を探していまして、グラトニーのカイさんとアクセルさんから、エナさんなら心当たりがあるかもしれないと聞いてやってきました」
丁寧なイオリの挨拶にエナばあちゃんはニッコリ頷いた。

「ここいらではエナばあちゃんって呼ばれてるから、そう呼んでおくれ。海産物の乾物？　若いのに変なものを欲しがるね。こんなのかい？」
エナばあちゃんは小さな干からびたイカを持ち上げた。
「スルメ!!　そうです！　そういうのです。昆布のものとか、魚のものとかないですか？」
テンションの上がるイオリを見て、エナばあちゃんは嬉しそうに箱を開けていった。
「昆布あるじゃないですか!!　これは……ヒジキ!?　海苔は……流石に1枚のはないか。でも、揉み海苔があるー!!」
「こっちも見てごらんよ」
「干し海老？　えー!!　煮干しも!!　凄いですね。これはエナばあちゃんが全て作っているんですか？」
「そうだよ。先祖代々が作ってきたんだ。普通の人は食べないけどね。私は好きだよ。時々、従魔の食糧とかに買っていく者もいるしね」
「そんな！　美味しいのに……。これを作るのに、どれだけ時間と労力がかかるか……」
エナばあちゃんは、イオリを不思議そうに見つめた。
「驚いた。作り方を知っているのかい？」
「いえいえ。なんとなく干すことまでは分かりますが、工程は知らないんです。だから、探していました」

「使い方は分かるのかい？」
「まぁ、使うことなら……」
「ヒジキも？　干し海老もかい??　それならアンタはこれの使い方を知ってるかい？」
奥の方から取り出した木箱の中にはイオリが求めてやまない例の物が入っていた。
「か……鰹節……」
感動のあまり震えて声の出ないイオリの脇からスコルとパティが覗き込み、鰹節を手に取り匂いを嗅いだ。
「いい匂いがするけど、硬くて……食べ物ではないね」
「うん。かじったら歯が壊れちゃいそう」
「私もね。それの食べ方が分からないんだよ。作り方だけは伝えられているんだが、硬過ぎて砕いたのを煮込むしかやり方がない。アンタはこれの食べ方を知っているのかい？」
目を見開き、自分の世界から戻ってこないイオリのお尻を、ゼンがトントンと叩いた。
「あぁ！　ごめん！　あまりの感動に思考が停止していた。食べ方ですか？　知ってますよ！　あのー。これと一緒に伝わった器具とかありませんか？」
「器具？　ふむ……あれかね」
そう呟くとエナばあちゃんは家の奥に探しに行った。
「イオリ。知ってるのか？　これの食べ方。木みたいなのに……本当に硬いぞ？　食えたもんじゃ

ない」
「まぁ、まるっと食べるものではないからね」
ニコニコと振り返るイオリを見て、家族達は不安に感じる。
「あったよ。これかね？」
エナばあちゃんが持っていたのは、まさしく鰹節を削るための大工のカンナのような箱だった。
「それ!!　それです。削って食べるんですよ」
「削る!?　それじゃ、ペラッペラのものを食べるのかい？」
「はい、使い方次第なんです。見せてください」
イオリは削り器を手に取ると長年の放置による歪(ゆが)みを確認して、腰バッグからトンカチを取り出し調整をした。
そしてニナに洗浄魔法をかけてもらうとエナばあちゃんに向かってニヤリとした。
「さぁ！　見せましょう!!　鰹節の使い方を！」
ゼンをはじめとした家族達はイオリのテンションに苦笑しながらも、美味しいものを楽しみに待つことにした。
「まずは……」
イオリは鍋に水筒から水を入れ、エナばあちゃんから借りたキッチンのコンロで火をつける。
「お湯を沸かします。その間に、鰹節を削りましょう」

削り器を床に置き両膝で挟むと上半身を使いながら鰹節を削っていく。
ザシュッザシュッザシュッ。
音を立てて削られていく鰹節をみんなが興味深く覗いた。
イオリは手を止めると箱の中をエナばあちゃんに見せた。
「木の皮を削ったみたい」
スコルがそう言うとみんなが頷いた。
「ふふふ。でも匂いはどう？　騙されたと思って1枚食べてごらん？」
イオリが言ったように、先ほどよりも良い香りがする。
エナばあちゃんは黙って1枚取ると口に入れた。
「なんと！　良い香りが鼻に抜ける！　それに、なんとも言えない味が美味しいのう」
「本当だ！　美味しい！」
「削っただけでこうなるのか？」
「凄いな……」
それぞれの感想を聞きながら、イオリは削った鰹節を沸騰したお湯にバサッと入れて少し煮ると火から下ろした。
「あとはしばらく、放置します。鰹節はスープの元になる出汁を取る物なんです。先ほど口に入れた時に味が広がったでしょ？　俺の故郷ではうま味といって、甘いもしょっぱいも苦いもこのうま

味が加わると、もっと味に深みが出ると言われているんです。山の食材だと、俺が作ったベーコンがそうだよ。一度燻してあるからうま味が豊富なんだ」
「燻す!!　お前さんは本当に、これの作り方を知っているんだね」
エナばあちゃんは面白そうに話した。
「やったことはないんですよ。なんとなくの知識だけで、俺は山育ちだから海の食材は詳しくないんです。でも、乾物は腐ったりしないから調理法だけ知ってるんです」
うんうんと頷くエナばあちゃんはイオリを嬉しそうに見た。
「そろそろ良いかもね。ザルに濾します。この場合、食すのはスープの方で本体自体は食べないんだ」
「「えー！　食べないの？」」
双子はもったいないと顔をしかめた。
「栄養や味は全部スープにあるからね。料理によっては食べる時もあるけど、今日はスープね」
塩で微調整するとイオリは器によそいエナばあちゃんに差し出した。
エナばあちゃんは匂いを堪能してから口にすると顔をとろけさせて言った。
「見事……」
イオリはそれを聞くと、ゼン達従魔に子ども達、ヒューゴ、アクセルにもスープを差し出し味見をしてもらった。

「「良いにおーい!!」」
「フーフー」
「おお!?」
「なんて美味しいんだ……」
イオリは最後に自分の分をよそいゴクリと飲むと故郷の味を思い出して泣きそうになった。
「美味い……」
その後は、米を炊き鰹節を使ったおにぎりを作ったり、スルメを焼いたり、ヒジキを炊いたりして乾き物を楽しんだ。
みんなでワイワイと過ごしているとエナばあちゃんがイオリを外へ引っ張り出した。
「本当に美味しかったよ。あの棒があんなに良い味が出る物だと知らなかった」
「エナばあちゃんの先祖の人のおかげですね。食べ方を知らなかったのに、よく伝えてくれていました。感謝します」
「うちの家系はね……。昔、フラッとこの街に現れた男が先祖なんだよ。何百年前だか知らないが、このダグスクの港街にその男が現れた。身元も分からない男は頼まれた仕事をこなして生活したそうだ。魔獣を狩ったり、街の治安を守ったり……今で言う冒険者みたいなことをしていたんだろうさ。男は街だけでなく世界を旅したが、結局は結婚してこの地に腰を下ろした。その後、男が作り出したのがあの棒を含めた乾物だった。この技術だけは絶えさせないでくれと言って死んでいったらしい。作り方は伝えても、いつの間にか食べ方を忘れちまった一族さ。従魔の旅食なんて言われ何の意味を持ってるんだか分からなくなることもあったけど、細々と作ってきた。でも……今日、その意味を知った気がする」
エナばあちゃんは目にうるうると涙を溜めてイオリを見た。
「その男の名はジュウゾウ。神の愛し子だった。……お前さんもそうなんだろう？　イオリ」
エナばあちゃんの言葉にイオリの全身の鳥肌が立った。
「……ジュウゾウ。それが前にいた愛し子……」
「そうさ。ジュウゾウは初代アースガイル王と友情を育み国づくりに尽力したが、王が止めるのを聞かず市民として生きる道を選んだとされる人だよ」
「……俺は自分が愛し子だと、神リュオン様に言われたことはないけれど、従魔のゼンはそうだと言います。俺は違う世界から転移してきたんです」
エナばあちゃんは両手で顔を覆い溢れる涙を抑えようとしていた。
「あぁぁ。愛し子様に会えた……。ジュウゾウがこの世に来て何百年か……。先祖達はこの日のために乾物を守ってきたのかもしれないね。再び現れる愛し子様の役に立つように……」
「では……ジュウゾウさんは俺のために？　乾物の技術を残したと……？」
震える手を抑え、イオリはエナばあちゃんを見た。
「そこまで考えてたかは分からないさ。ジュウゾウ以降にも愛し子様が現れたこともある。何はと

もあれ、私らの乾物をイオリ様に喜んでもらえた。それだけで十分だ」
イオリはエナばあちゃんの手を握ると一緒になって涙を流した。
「伝えるって、何て大変なことなんでしょうね。鰹節1つでジュウゾウさんが苦労されたであろうことが想像出来る。そして、乾物の技術を守り抜いてくれた人達の思いや努力も俺は感じ取ることが出来ます」
エナばあちゃんが涙目で微笑むのを見て、イオリは姿勢を正して改めてお礼を言った。
「ジュウゾウさんはおそらく俺の故郷と同じ人なのでしょう。名前からするに、俺の時代より遥か昔に生きた人に感じます。長い間、我々の故郷の味を守りぬいてくださった、先祖代々の皆様を含めエナさんにお礼申しあげます。ありがとうございます」
頭を下げるイオリにエナばあちゃんは感涙した。
「こ……こちらこそ、ありがとう。愛し子様の役に立てて、これほど嬉しいことはありません」
2人はニッコリと笑い、イオリが知っているジュウゾウの技術の穴埋めをした。
昆布や、煮干しの出汁の取り方。
味噌の実やショウユの実を合わせる方法。
生魚の日干しの方法などはジュウゾウが伝えていたが、所々忘れ去られた内容もある。
それをイオリから聞き、エナは嬉しそうにメモを取った。
そんな2人に気づいて出てきた子どもやヒューゴ達は、入り込めない雰囲気に顔を見合わせ微笑

んだのであった。
「私には息子家族がいるんだ。本来これだけで食べていければ良いんだが、そんなわけにもいかなくて漁師をして生計を立ててる。この話を聞けば喜ぶだろうさ」
「是非、お会いしたいですね。どうでしょう。近々、皆さんで俺が作る料理を食べてもらえませんか？　自分達が何を作っているのか分かれば、一層頑張れるでしょう」
イオリの提案にエナばあちゃんは大喜びで了承した。
イオリは、アクセルにもカイと共に出席するように頼んだ。
「エナばあちゃん達がギルドへ技術の登録をしなかったのは、認められないと分かっていたからですね。偏食と思われていたんだから、仕方がありません。是非、この技術を街を挙げて守ってもらいたいんです」
イオリの力強い言葉にアクセルは頷いた。
「父に伝えます。確かに驚きました……。王都に行く前に自分の知らないものがこの世界に沢山あると知れて良かった。何より、それが地元にあったのに、知っていたのに、深く知ろうとしなかった……。グラトニーとして恥ずかしい話です。父を引っ張ってでも参加させていただきます」
アクセルは将来を見据えているかのような目をしてそう言う。
乾物も面白いことになるなとイオリは感じ取った。

「長居をしてしまいました」
イオリの言葉を聞き、エナばあちゃんは首を横に振る。
「良いさ。イオリ様ならいつでも来ると良い。それに沢山の乾物を買ってもらったからね」
「様なんてつけないでくださいよ。俺は単なるイオリです」
「そうかい……。アンタもジュウゾウと同じだね」
エナばあちゃんはニッコリ笑うと頷いた。
「おばあちゃんとまた会える？」
別れの空気を察したナギが、イオリに眉を下げて言った。
「今度別邸へ来てもらうことになったよ。俺のご飯を食べてくれるって。みんなでお出迎えしよう。それじゃ、また」
「「わーい！　バイバイまたね」」

イオリは喜ぶ子ども達を連れてエナばあちゃんの家をあとにすると、軽やかに街の中心地へ向かっていく。
「喜んでもらえて良かったです。エナばあちゃんも……別に普段から愛想が悪いわけじゃないけど、いつもより楽しそうでした」
アクセルの言葉にイオリは微笑んだ。

「そうですね。俺も楽しかったです。アクセルさん。この時間でも食材の買える店はありますか？　それと教会ってどこにあるでしょう？」
「教会ですか？　教会は侯爵邸の先の高台にありますよ。この街でも古い部類の建物です。食材なら、〝大海の窓〟という商店があります。友達の家なんですけど、ご案内しましょう」
そんなアクセルについてイオリ達は移動した。
本来はサブマスが教えてくれた奥さんの店、珊瑚の小箱に行く予定だったが、エナばあちゃんの家で米やら出汁やらを食べてお腹いっぱいになった一行は明日にしようと諦めたのである。
大海の窓に着いたのは昼も過ぎた辺りだった。
「おじさーん！　お客さん連れてきたよ！　ヴィリいる??」
頭に布を巻いたおじさんが太陽のようにニカッと笑うとアクセルに手を上げた。
「おう！　アクセル！　ヴィリなら裏で仕分けの手伝いをさせてるよ。客ってか？　良いねー、ありがたいねー。お客さん！　何にする??」
大きな声に驚いたのかニナはヒューゴの足に抱きつき、苦笑したヒューゴに抱き上げられていた。
「こんにちは。この店には何があるんですか？」
「ここかい？　漁師から直接買い上げた魚や貝だろう。新鮮な野菜もあるよ。良いものを置くのがうちの売りだからね。ちょいと値が張っても売れていくよ」
だから、朝市を薦められたのか……とイオリは理解すると店に陳列された野菜と桶（おけ）の中で泳いで

いる魚や貝をピックアップしていった。
「これとこれ。……あとこれも。こっちのも良いな」
生き生きとしたイオリは、陳列されている桶の間をスイスイと移動していく。
その後ろを店主が手桶を抱えてついていく。
「お客さん。見る目あるなぁ。良い物ばかりを選んでやがる」
「生きてる時点で良いものでしょ。野菜も下さい」
「あいよ！　気前がいいね。捌こうか？」
自分でやるとイオリが断っていると、店の奥から青年が出てきた。
「ヴィリ！　調子はどう??」
アクセルがにこやかに挨拶すると、ヴィリと呼ばれた青年も笑顔で手を上げた。
「アクセル、どうした？　買い出しか？」
「あぁ、うちのお客様を連れてきたんだ。料理をされる人だから。この時間なら大海の窓だろ？」
「毎度！　と言いたいがな……ハァ」
ヴィリは深いため息をつくと親父の雷が落ちた。
「店先でため息なんかついてんじゃねー！　お客さんに失礼だろうが!!」
そこで初めてイオリ達に目をやったヴィリが目を見開いて近づいてきた。
「お客さん……いくつです？」

「俺？　18ですけど……？」
「俺と同い年じゃんか！　それで冒険者やってんのか？　……ですか？」
ヴィリは目をキラキラさせてイオリ達を見てきた。
「まぁ、そうですね」
バコッ!!
親父がヴィリの頭を叩くとイオリ達に頭を下げた。
「すみません。お客さん。躾がなってなくて」
「お気になさらず。冒険者に興味があるんですか？」
「いってー。何すんだ親父!!　俺と同い年が冒険者やってんだぞ!?　俺だって出来るってことだろ？」
「馬鹿野郎が！　そんな甘いもんじゃねーって言ってんだろうが!!」
「ヴィリ……。まだ、冒険者になりたかったんだね」
アクセルが困ったように親父とヴィリの間に入った。
「そうだよ！　お前だって、今度王都に行くだろ。俺だって、この街だけにいたくねーよ。冒険者なら、旅が出来る。なぁ、そうだろお客さん！」
そう聞かれてイオリが困っていると、アクセルがイオリの前に立って大声を出した。
「うちのお客様に迷惑かけるのやめてくれ。それに、イオリさんはただの冒険者じゃない!!　旅が

したいだけの理由じゃ、親父さんを説得なんて出来やしないぞ！」
「うるせー！　グラトニーの小倅が！　お前みたいな坊々はなんでも出来て良いよな。俺なんか、商店の跡取りだ。お前とは違うんだ‼」
「ヴィリ！　てめー！」
店の前で乱闘が始まってしまいそうな雰囲気を察して、ゼンが一声吠えた。
「ガウ‼」
ゼンの声に驚いたのか3人は動きを止めて気まずそうに俯いた。
「親父さん。全部でおいくらですか？」
優しいイオリの声に親父は驚いたように叫んだ。
「銀貨1枚だ！」
イオリはニコニコと魔道具の腕輪から銀貨を出して支払うと、ヴィリに向かって言った。
「俺は……ここにいるみんなは……心から心配して頭を殴ってくれる親父が欲しかったけどね。何もないから、冒険者になったんだ。冒険者になるのは簡単だよ。でも、五体満足で生き残るのは難しい。旅をして、グラトニー商会の地域での大切な役割を見てきたよ。この街でも同じだろうね。将来、アクセルさんは重い責任を背負うことになる。君も分かってるはずだよ。悲しい言葉を言う前に、自分が持っている物を数えてみればいいよ」
ニッコリ笑うとイオリは家族を連れて店から出ていった。

大海の窓の親子喧嘩を見届けることなく店をあとにするイオリ達を、アクセルは慌てて追いかける。
「すみませんでした。いつもは普通の店なんです。最近のヴィリは何か焦っているようで機嫌が悪いんですよ」
「反抗期ですかね。あとは、アクセルさんという友達が巣立っていくのに自分は同じ所にいて良いのかという迷いもあるのでしょうね。さっきはあんなことを言いましたけどね。それでもやるというなら、止めることは俺らには出来ないと思うんです。ただ……冒険者になるっていうのは、自由気ままとは違うかなって、ねぇ？」
イオリに意見を求められたヒューゴは渋い顔で頷いた。
「あれじゃ、物になるまでに時間がかかるかもしれないな。俺は親がクソ野郎だったから飛び出した口だから何とも言えないが。冒険者には生きていくためのアグレッシブさが必要だ。イオリのように若くして認められるのは稀なんだ。子ども達はそれに引っ張られるように強くなるし、立ち回りなんか大人顔負けさ。そして、イオリが言ったけど冒険者になるのは簡単だ。ギルドで登録すれば良いんだからな。でも、その後の生き方に何を見出し成し遂げるのか……。それがない奴の多くは、俺の知る限り、数年で大怪我の末に辞めるか、犯罪に手を染め牢屋に行く……最悪は死だな」
アクセルはヒューゴの説明に顔を青くした。

「何とか、やめて欲しいところです。イオリさん達冒険者の存在が大切なのは分かっています。しかし、僕がダグスクに戻ってきた時に一緒に街を盛り立てる人間が必要です。幼い頃から一緒に育ったヴィリと街のために生きていきたいのに……」
イオリは微笑むとアクセルの背中を叩いた。
「それを言葉にして言えば良いんですよ。ただ子どものように心配して欲しいわけではないと思いますよ、彼は。対等な立場で君と同じものが見たいのだと思いますよ。言わないと伝わらないことがある。あとで、言っておけば良かったと後悔のないように」
「はい……。そうします。僕……」
「教会って侯爵家の先の高台の建物ですよね？　自分達だけで行けると思います。今日はありがとうございました」
微笑むイオリ達に背を押されるようにアクセルはニッコリ笑い頭を下げた。
「こちらこそ、ありがとうございました。ベアンハート神父はお優しい人です。お気をつけて！」
アクセルはそう言うと来た道を走って戻っていった。
「「イオリ……」」
何やら言いたそうな双子の前にイオリは屈み込んで抱きしめる。
「そう。言いたいことは伝えよう。俺らは生きてるんだから」
「「……うん」」

少し考えてから双子は口を開く。
「ボクはみんなが好きだよ！」
「パティも！　みんな大好き！」
釣られたように、イオリ、ナギ、ゼンも思いを伝える。
「俺もみんなが大好きで大切だよ」
「……ナギも！」
『ボクもだよ。イオリ大好き！　みんなも大好き！』
アウラもソルも上機嫌でピョンピョンと飛び跳ねる。
ニナも全身でアピールしている。
「……俺は言わねーぞ？」
1人顔を赤くしているヒューゴに子ども達が纏(まと)わりつく。
「ヒューゴはボク達嫌い？」
「「そーなの？」」
ナギの言葉に同調する双子。
抱き上げているニナに頬をペチペチと叩かれながら、ソッポを向いたヒューゴは教会までの道を足早に進んでいった。
「そんなわけねーだろ」

「「じゃあ、好き？」」
「好き？」
「言わない！」
ペチペチ！
イオリとゼンはそんな家族を見て笑いながらあとをついていく。
『イオリ。家族って良いね』
「そうだね。この世界に来てからゼンがいてくれたから寂しくなかったけど、こうやって、子どもの声が溢れてるのも悪くないね」

3

昔々、国という概念がなかった時代。
1人の男が現れた。その名をマテオ・アースガイルという。
マテオは各地で起きている飢饉（ききん）や争い、それについてまわる迫害に心を痛めていた。
世界を見て回ったマテオは、まだ小さな港街で1人の男に出会う。
その男は風変わりな姿をしており自分のことをブシやサムライという言葉で説明した。

立ち読みサンプル
はここまで

その男は、マテオがこれまで見てきた猛者（もさ）達とは違う志を持っていた。
弱者を救い、強き者へ挑む。
男の考え方に感銘を受けたマテオは、自分の仲間になって平和な時代をつくる手伝いをして欲しいと願った。
男はマテオに問いかける。
「平和とは何だ？」
マテオは答えた。
「飢饉や争いをなくし、何よりも迫害をなくし、エルフも獣人も……人間も、皆が平等な世界……」
男は再び問いかけた。
「それを成し遂げて何とする？」
マテオは答えた。
「いく歳月が過ぎようとも、私の想いが続く世にしたい」
男はマテオに向けていた鋭い目を和ませ言った。
「ならば、国を作るしかあるまい。国を作り、お前が王になれ。そして、法を作れ。お前が死しても想いは法と共に残る。しかし、子孫に伝えるべきは法のみにあらず。想いも一緒に受け継がせよ。それが、お前が何かを成し遂げたということだ」
マテオは男に誓った。